最優秀賞

航路が繋げてくれるもの

三島村立三島片泊学園 9年（中3） 下戸 悠太郎

「ボーッ」

島中に響き渡る船の汽笛。重低音の

「ドッドッドッ」

という振動が空気を震わす。

「おお、来たなあ。」

地域の人達が次々に港に集まり、皆で協力してコンテナから荷物を下ろし、笑顔で会話を交わす。いつもの島の風景である。

私の住む黒島は、人口二百人以下の小さな島である。商店が無いので、食料や生活用品は週四便のフェリーで運んでもらわなければならない。なので台風などで欠航が続くと物資の供給が滞り、大変苦労する。そんなこともあり、船の汽笛を聞くと、ほっとすると同時に心が弾む。港に集まる地域の人達も皆笑顔だ。

「よか天気じゃがねえ。」

「今日は荷物が多かなあ。」

私はこの穏やかな光景が好きだ。フェリーは海の道を通って、この島に安心と笑顔を運んでくれる。しかし最近、港を離れるフェリーを眺めながら、私は胸が締めつけられるように感じることがある。それは、私の島立ちの日が少しずつ近づいているからだ。

島には高校がない。そのため、進学を控えた私は、来年の三月にはこの島を離れなくてはならないのだ。それは同時に多くの人達との別れを意味する。家族同然に接してくれるあたたかい島の人や、互いに協力し合い、切磋琢磨してきた二人の同級生。そして私をいつも見守り、励ましてくれた家族とも別れて暮らすことになる。新しい土地での生活や人との出会い――。あのフェリーの進む道の先にはどんな未来が待ち受けているのだろう。不安と希望が入り混じる。しかし、私はどこへ行っても、ありのままの私らしくあり続けたい。この島で教わったことや、感じたことを心に刻み、出会った人達への感謝の気持ちを忘れず、自分に正直に生きようと思う。

今日も澄んだ青空に汽笛が響く。

「心配するな。帰りたくなったらいつでも運んでやるさ。」

汽笛は私を優しく励まし、背中を押してくれるようだ。

「大丈夫、困難という荒波にも立ち向かってみせます。」

そう笑顔で誓った。

（審査評） 作者の住む小さな島にフェリーが着く。それは食料や生活用品を島に届けるだけでなく、安心と笑顔をもたらす。普段の何気ない光景ではあるが「島立ち」の日を間近かに控えた作者の胸に去来する思いには特別なものがある――淡々とした表現のなかにも未来への決意をしっかりと描き切った秀作。未知なる海の道の先にあるもの、それを目指し「自分らしく正直に」進もうとする若者の心意気。それを後押しするかのようなフェリーの汽笛や島民の温かい声援が、読む者の耳にも聴こえてくるようだ。

小幡眞吾